HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北見市役所
Citation	高等継続教育研究, 4, 89-101
Issue Date	2005-09-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/35132
Type	bulletin (article)
Note	第2部資料編 第1章インタビューの記録3; 日時:2004年8月3日10:30～12:00, 場所:北見市役所会議室, 話し手:浦昌哉・近藤和雄, 聞き手:姉崎・光本・石山・伊藤・上田理・佐々木・佐藤革・佐藤克・滝ヶ平・星
File Information	4_p89-101.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

3. 北 見 市 役 所

日　時　　2004年8月3日　10:30～12:00
場　所　　北見市役所会議室
話し手　　浦　　昌哉 氏（企画部企画課長）
　　近藤　和雄 氏（企画部企画課係長・企画担当）
聞き手　　姉崎・光本・石山・伊藤・上田理・佐々木・佐藤革・佐藤克・滝ヶ平・星

北見市の概況

浦　まず北見の概況ということなんですが、みなさん道内のご出身でしょうか？北見という地名はご存知でしょうか？実は、北見という地名というのは本州の方に行きますとほとんど知られていないんですね。私はたまたま関西の方に行っていたんですけれど、北見ってどこ？といわれても説明できないんですよ。北海道の地図を見て、『右側にオホーツク海があってそこに網走という所があってそこから50キロくらい内陸に入ったところ』だといわないとみんな分かってくれないんですよ。『網走』は非常に知名度があるんです。何でみなさん網走という地名をご存知なんでしょうね？

伊藤　刑務所。

浦　そうですよね（笑）。イメージとしては、やはりどうしても網走番外地というものなのかなと思います。それで、知名度的には間違いなく網走です。だからどうだというわけではないんですけれどね。
北見についていいますと、北見の面積は421 km^2です。ですから北海道の中でも特別大きい方ではないです。いま合併の話が出ているんですけれど、北見は1市4町で法定協の話が出ました。北見市・端野町・常呂町・津別町・留辺藥町、この1市4町です。人口でいうと1市4町が集まっても13万9000人くらいにしかなりません。約14万人です。

北見市が11万人ですから、4町分で3万人が増えている。面積でいうと1市4町合わせるとどれくらいの大きさになると思いますか？

光本　東京都くらいですか？

姉崎　23区くらい？

浦　東京23区でたしか680 km^2くらいだった気がします。東京都で約2000 km^2くらいだと思います。1市4町合わせると2200 km^2弱なんですよ。ですから東京都とかと同じくらいの面積を持つ一自治体がもしかしたらできあがるかもしれないというわけですね。いまそんな動きになっております。端的にいうと留辺藥町の石北峠から常呂町、オホーツク海までが一つの自治体なわけです。ですから、行政としては目配りするとかそういう次元じゃなくなるかもしれないですね。

浦氏（左）・姉崎

このあと網走と紋別にも行かれるということですので、まず管内の方からいいますと、管内の面積は1万700 km^2。面積の70%くらいが森林です。北海道はどこでもそうだと思うんですけれど、林業を中心として発展してきました。その中で人口は約34万人。人口密度でいうと1 km^2当たり32人です。

最近はオホーツクというイメージの中で流氷観光が出てきて、管内の観光客は年間1000万人を超えているんですけれども、そのうち北見はというと、なかなかです。ここはどうしても滞在型というよりもどっちかというと素通り型なんですね。直接ここに留まって見るものもあまりないと、昔からそういう話がずっとされていたんです。ですから、網走に宿泊したり、知床に行くだとか、そういうようなかたちだったんですけれど、逆にここのところのメリットというのは、国立公園でいうと三つ、大雪・知床・阿寒まで車でおよそ1時間から1時間半で行けます。釧路も2時間強で行けますので、2時間で四つの国立公園を回ることができる。ということは、逆に、ここをベースにすれば三つの国立公園は間違いなく行ける。ですから、

いままでというのはどうしてもそこのところをずっと回るような観光しかできなかったんですけれども、そうじゃなくて、一カ所に留まって、そこから放射線状に行ってもらう、いま北見はそんなようなことを考えながらやっているんですけれども、それもおいおい話をしていきたいと思います。

北見で全国一の生産量を誇っている物というと、みなさんご存知ですかね？必ず食べられているものなんですけれども。

石山　たまねぎ。

浦　そうです。たまねぎの作付面積ナンバーワンです。農業でいうとベースはやはりたまねぎ、小麦関係、こういったものがベースとなります。

工業では、日本を代表するといいますか、北見工業団地に京セラさんが北見工場を持っています。もともとは京セラさんじゃなくて別の会社だったんですが、それが合併してというようなかたちで京セラさんになっているんですけれども、携帯電話をいま道内に提供しています。ほかにもメーカーさんが来て同じように携帯電話をつくっているのですが、もともとは、ここの気候というのはどちらかというと北海道の中でも湿気のないところなんですね。北海道自体が湿気が少ないですけれど、ここは海から若干離れているということで、非常に乾燥しているところなんです。ここ何日かずっと暑くて、北見も35度くらいになっているんですけれど、そういった中で、非常に空気が乾燥しているということで、昔から精密機器、水晶振動体ですとかそういったような類の工場が比較的多く入ってきていました。そういった流れを汲んだ中で、京セラさんですとか東京電波さんですとかが企業進出をしていただいてきております。

商業関係でいうと、ここはどちらかというと流通の拠点となっております。管内の物資をある程度ここのところに集めてそこから持っていく。管内の流通の拠点を占めていますね。

あと、さっき農業の中で小麦の話をしましたけれども、実は北見が誇れるようなものがもう一つ、地ビールがあるんですよ。みなさん飲んでいただけるかどうか分からないですが、もしチャンスがあればぜひ、オホーツクビールというのがありまして、これはかなりの回数、金賞ですとかグランプリですとか、いろんな大会で受賞しています。私がこんなところでPRしてもなんですけれど、間違いなくおいしいです。地ビールも一時期規制緩和があって、いろいろなところで出そうとしてきましたけれど、なかなか最後までうまくいっているところがない中で、北見の地ビールはかなり有名になって、品質的にも決して引けは取らないと思います。そういったビールをベースにして全国各地のビールを一同に集めてビール祭をやってみましょうかということで、6年くらい前からドイツのオクトーバーフェストにならって、「全国ビール祭」と。北は北海道から南は沖縄まで、それに海外のビール会社も何社か入っていただいて、そういうようなイベントもやっております。

それから、北見はこういう気候ですので、日中はけっこう快晴ということで、太陽の光を何とか利用できないかということで、ソーラーエネルギーの研究もしております。これももう10年以上前になりますけれども、日本で初めて公道を使ったソーラーカーレースをやりました。ですから最初は警察の方から相当いわれましたけれど、何とかやらせていただきました。二度ほどやったんですけれど、三度目からはもうさすがに許可ができないといわれました。あまりにも性能が良くなりすぎて、時速90キロ以上出すのに軽量な車体にしているものですから、事故があったときに責任が取れないということで、警察はさすがにもう公道は使わせてくれないことになりました。ですから、いまもソーラーカーレースはやっているんですけれども、通常の民有地のサーキット場みたいなところでやっています。鈴鹿ですとか男鹿半島ですとか石川県の能登ですとか、そういったところでいろいろとレースをやっていますけれども、日本で最初に公道を使ってレースを行ったのはこの北見です。

姉崎　それは北見工大も？

浦　はい。北見工大さんも参加していただきました。全国各地から参加していただいています。

だいたい北見のベースをいうとそういったようなことですね。

姉崎　就業人口の構成はどんなふうになっているんですか？北海道はだいたい1次産業が多くて2次、3次が少ないということが一般的なんですけれど、そういう意味では2次も3次も多いんですか？

浦　そうですね、2次も3次もかなり比率は高くなっております。

北見市の大学誘致構想

姉崎　それでは、少し対象が狭まりますけれども、我々は大学、短大・専門学校も含めた高等教育機関に焦点を当てていますので、その点でかなり予算も使い精力的に大学を北見市に誘致されるということをな

さってきたと思うんですけれども、これくらいの人口規模のところで国立大学があり、今回札幌に戻りますけれど北海学園北見大学があり、赤十字大学も近郊にあったりして、自治体としては精力的に大学というものを入れて開発を考えていらっしゃってきたと思うんですが、最初そのあたりの自治体と大学との関係についてお話をうかがいたいのですが。

浦　いまのお話で申し上げますと、みなさんのお手元にお配りしております総合計画に町の進むべき方向、こんなような町にしていくんですよということがだいたい書かれているんですが、その中で、昭和 40 年代に北見市は研究学園都市構想を立てました。その前に、昭和 34 年ですけれども、北見工業大学が国立の 2 年制の短期大学として開校しております。昭和 41 年に四年制の工業大学に昇格しております。それ以降、オホーツク圏、網走管内で他に大学がなかったものですから、その研究学園都市構想の中で、何とか文系の大学を誘致できないかということで。

その背景には、当時の学生たちが東京・札幌など地元から外に出て行く、そうなったときに親御さんの負担もかなりのものがあるということで、何とか地元に工業系以外の大学を誘致できないかということで、それこそ官民挙げて誘致期成会を立ち上げ、そこのところで誘致を図ってきたという経緯がございます。

その中で北海学園に対しまして昭和 48 年に要請をしまして、昭和 49 年に設立期成会を発足させました。昭和 50 年に市役所の中に北海学園北見大学の設立準備室を開設しております。国の動きとしては設置基準が大幅にきつくなっていたはずです。北見も相当苦しいという話を受けたようなんですけれども、何とかそこのところをクリアして、昭和 52 年の 4 月に北海学園北見大学が開校しています。

その後さらに、短期大学を設置できないかということで、同じく誘致期成会を昭和 55 年に発足させまして、いろいろと運動を行い、昭和 59 年の 4 月に短期大学を開学しております。

北海学園北見大学の撤退とその後

浦　短期大学の方は残念ながら昨年の段階で卒業生を全部送り出して幕を閉じたというかたちになっています。四年制の大学につきましても、今年の 4 月の段階で、学校法人北海学園の方が平成 18 年度に本学機能を札幌の方に移しますということになっておりますけれども、北見の現校舎はキャンパスとして残して活用していただけるというお話をうかがっております。

私どもとしましても、いままでの大学は 4 年間そこのところに住んで学ぶというかたちだったかと思うんですけれど、そうではない別なかたちで短期集中のカリキュラムとか、例えば特区構想の中でそこだけを一つ特区にして外国語教育だけ一貫して、例えば 1 カ月 2 カ月の集中講義を組んでみるとか、そういったような使い方ができないのか。ま、これは自治体だけでできるわけではありませんので大学側に対しても要請はしていくんですけれども、そういったようなかたちで新しい大学の姿を探ってみれないかということでいろいろとお話はさせていただいています。

姉崎　いまのお話は、大学ともまだ非公式だけれども話合いはされているということですか？

浦　はい。ですから学校法人北海学園さんは何らかのかたちで北見キャンパスとして使えるように活用したいと。その中で市としても学生がある程度残ってくれるようなかたちということで、いろんなかたちを模索しながら話を進めさせていただいています。

日本赤十字北海道看護大学

浦　北海道看護大学は日赤北海道支部が四年制の看護大学を北海道につくりたいという構想を平成 5 年に打ち出したわけなんですけれど、そのときに候補地となるのが赤十字病院のあるところだったんです。それで北見も、それであればということで名乗りを上げました。その他にも伊達と栗山にも赤十字病院があるので、それらの地域も名乗りを上げたわけです。北見は同じように誘致期成会を設立して誘致運動を繰り広げ、平成 6 年の 3 月に北見に大学を設置しますよというかたちで決定しました。

そのときに、北見はたまたま時期を同じくして地方拠点都市の構想があったわけです。この地方拠点都市構想というのは、いままでは大都市への一極集中が過度になってきたという現状があるものですから、北海道でいうと札幌ですけれど、47 都道府県の中で一カ所ないし二カ所くらいの地方都市にある程度の機能を集中しましょうという国の政策が打ち出されたわけです。そこのところで拠点地域に指定をされることによってかなりの優遇措置が受けられるような状況になったわけで、北見も北見市、網走市、それから端野町、美幌町、女満別町、この 2 市 3 町でオホーツク地方拠点都市地域というものに名乗りを上げて指定をいただいたわけです。

大学と何が関係あるかといいますと、本来的には大

学に対する市政については自治体は通常国の補助の類はまったくないんです。それが地方拠点都市の指定を受けたことによって補助金に対して起債措置を受けられますという優遇措置があるということが拠点都市の中にあったものですから、北見市としては日赤看護大学の設立にあたって29億円の寄付金と補助金を出しておりますけれども、その中でかなりの額を起債で賄ったという経緯があります。そういった中で平成11年に北海道看護大学が開学しまして、その後昨年に大学院が開設されたんです。

北見工業大学は国立ですので、開学にあたって自治体がというようなことはなかったんですけれども、残りの三つ、北海学園北見大学、短期大学、それから日本赤十字北海道看護大学については自治体側としての補助なり何なりというかたちでの支援というのはございます。

大学誘致運動の効果

姉崎　誘致などに中心となられた市民の方々あるいは産業界の方々はどんな方が中心になっておられたのかということと、自治体がそれ相応の寄付をしたりするわけだから議会にかかりますけれど、議会の方の対応はどんなふうだったのかということをお聞きしたいんですけれど。

浦　まず構成ですけれども、誘致期成会の会長は前市長かと思います。そこのところは行政が前面に出て、それから市内の経済団体の方は主立った方々は入っていたかと思います。こういうようなかたちで官民を挙げてとりくんだわけです。

あと、議会との対応というのは、これはもちろん行政ですので、北海学園北見大学のときもそれから看護大学のときも、それぞれ設立準備室というのを設けまして、その中で行政的に進めさせていただきました。こういうようなかたちになっております。

上田　そのときは議会は両手を上げて賛成というかたちだったんですか？

浦　北海学園北見大学のときは、私は直接携わっていませんけれども、当時のやつを紐解きますと両手を上げて賛成でした。看護大についても同じようなかたちで賛成はしていただきました。当時は、それこそ大学を誘致するのも自治体の活性化の起爆剤の一つということだったんじゃないかと思うんです。昨日ちょっと面白い新聞記事が出ていたんですけれど、朝日新聞お読みになりました？「私大誘致町おこし　夢破れたり」という記事です。

光本　北海道は載っていなかったように思いましたけれど、全国的な問題ですよね。

姉崎　リゾート開発と同じ。

浦　かなりこういうようなかたちで地方自治体至るところで大学誘致が行われているんですけれど、この前のニュースを見ますと、2007年には希望者は全員大学に入学できるような状況になるというようなニュースも出ていましたし。

当時、議会サイドとしても、地域おこしの一環としての大学誘致というのは有効手段だったと思います。間違いなく学生さんが4年間いるわけですから、そうすると、住むところが間違いなく必要になって、食べるもの、着るものそして遊び。そういったような状況を考えますと、経済波及効果というのはかなりのものがあるはずです。

姉崎　まだその意味では続いている看護大はこれからですし、北見大学の場合は学園内部の問題が多かったように思うんですけれど、経済効果は当然大学を立地するときに生じますけれど、そろばん勘定だけではないような、ある種の文化的教育的な波及効果みたいなものがなかなか数字に出てこないという問題もあったりします。自治体側から見たときにそのへんをどういうふうに評価されているのか。つまり、実際先ほどのような状況になって、夢破れたことになったのか、それともそれなりの効果を持ってきたというふうに考えていらっしゃるのか。

浦　効果としてはたしかに、それなりに町に出ています。結果として一部紅一点の状況になったというのはございますけれども、看護大学さんですと、いまニーズになっているような看護の人材を育てるということで、卒業された方は地元ばかりじゃなくて全道各地、そして全国に行って活躍をされるということですから、これは間違いなく北見市にとって有益なことであるというふうに考えています。それに、町にとってもやはり若い方が学生さんたちがいるというのは非常ににぎわいがあるような感じがしますよね。街が活き活きしている。そういったような街のイメージというかたちで考えたときに、学生数の減少というのはちょっと厳しいかなという気はするんですけれども、それには工大さんも看護大さんもまだおりますので。ただ、学生さん自身が最近あまり街が魅力なくなったというか街に出てこなくなったという気がしますね。

光本　以前と比べてそういう傾向があるということですか。

浦　私のところの子どももそうなんですけれど、外

に出ていってというより家の中でテレビゲームをしているのが多い気がするんです。どうなんでしょうね、これは本当に。大学生でもどっちかというと街中にあまり出なくなったのかなと思って。買い物とかもコンビニでぱっぱっと済ませてしまって、それこそゲームじゃないですけれど、家の中で音楽を聞いている方が楽だという、そんな生活になっていると思うんですけれども。

上田　以前だったらいろんな飲み屋さんで会ったりとか。

浦　ええ。楽しみもあまりなかったでしょうしね。変な話、私らが学生の頃には 4 畳半か 6 畳でテレビも満足になかったものですから、かえって町に出た方がおもしろいかなって感じでずっと出ていたような記憶があるんですけれど。

姉崎　人口的には 3 大学合わせると関係者も含めていうと相当な比率になるんじゃないですかね。それから、にぎわいの問題もあるし、ある種の波及効果、室蘭工大は道内の出身者が多いんですけれど、北見はかなり道外からたくさん来られたり、日赤の場合も相当外から来られているということもあって、そういう全国型で集まってこられて、そこがもたらすプラスアルファというか、そのへんはどう見てらっしゃいますか。

浦　そうですね。全国から来ていただけるというのは非常に嬉しいことだと私たちは思っています。

その方たちが 4 年間なりの大学生活を終わってこの地域に就職するということだけでなく、先ほどもいいましたように、道内、それから全国いろんなところに出て行って活躍をしていただけるということであれば、北見から出てきた学生たち、学んだ学生たちがこれだけのことをできるんだよ、やってくれるんだよ、とそういうものを身をもって示してくれる。本当にみなさん北見市のメッセンジャーになっていただけるんですね。北見はどんな街だったのと聞かれたときに、4 年間の経験の中で実はこんな街だったんですと、そうやっていっていただけると、我々がいくら PR するよりもずっと良い PR の方法になると思うんです。

ですから、地元の方ももちろん大切ですけれども、全国各地いろんなところから来ていただいてそこの良さを知っていただいて、そして全国各地に飛び出していっていただけると。こういった部分というのは本当に費用には換算できないような間違いない PR 方法だと思っています。

大学との協議、市側の対応

姉崎　そうすると、少ししつこくなりますが北海学園北見大学が札幌に移転してしまうというのはどんなふうに受け止められていらっしゃるのですか。

浦　やはり厳しいですね。北見の PR として人口 10 万人規模で四つの大学を有する研究学園都市ですよと、ずっとこういうようなかたちで PR をしてきましたので、その中の柱の二つが欠けてしまうのはきつい部分ではあります。大学というのは間違いなく知的な財産であるわけですから、そこの部分の一つが欠けてしまうと、北見のことでいいますと、工業系があって文科系があって、新たに看護系ができあがってと、まったく違う分野ですので、そこの中でいろんなとりくみができる、そういうようなことをずっと PR をしてきましたので、そこの中でいうと影響は大きい気がしますね。

光本　以前、短大が廃止されて、当然そういうことが起これば次は北見大学の方もどうかという懸念はされていたんじゃないかと思います。この間、大学と、北見市に残ってもらうためのいろんな折衝ですとか協議ですとか何かそういうことは具体的にあったんでしょうか。

浦　私どもとしましては入学定員が平成 11 年度を境に減少傾向になってきたものですから、このままじゃどうしても落ち目になってしまうということで、対策というようなかたちでずっと考えてはきておりました。その中で行政として各種のこともやってまいりましたし、協議会を設立しましてその中でいったい何ができるのだろうかと。そういったような中でいったん決めていろいろなことをしてまいりました。平成 15 年度から私立大学に入学する新 1 年生を対象に北見市独自の奨学資金を出す制度を設立しました。私立大学ですので北見大学と看護大学の 2 校しかないのですけれど、年間 60 万円を限度に奨学金をお貸しする。利子については無利子とします、その部分は北見市が利息については補填しますと。簡単にいうとこういった対応です。

上田　これは人数制限は。

浦　人数は二つの大学合わせて 50 名ということです。

光本　協議会といわれましたけれど、市と大学の協議会ですか。

浦　市と大学とそれから民間も入った中での協議会です。

光本　北海学園と市ですか。それとも看護大学も入っ

ているんですか。

浦　　いえ、看護大は入っていません。

姉崎　先ほどの大学の内部の決定でキャンパスを活用するということを決められたと思うんですけれど、こういう協議会の中でそういう方向に、全面撤回ではなくてある程度残して、というような成果にもなったということですよね。

浦　　そうですね。私どもはある程度大学運営のことを話して、最終決定は大学です。大学としては、北見の熱意でこちらの方に来ていただいていますので、定員がある程度減になったからすぐ撤退ということじゃなくて、新たな方向をいっしょに行政と考えさせてもらえないでしょうかと、こういうふうに私どもは受け止めています。ですから、私立大学としての採算ですとか何とかということでそのまま帰りますということではないと理解しています。

光本　協議会に入る北海学園側というのは学校法人の方ということになりますか。大学の代表者ですか。

浦　　北見大学の代表者ですね。

光本　そうすると学校法人北海学園の方からは特に加わっていないということですか。

姉崎　北海学園は学校法人としては豊平にある北海学園大学と北見大学と、その上に学校法人があるものですから、学園全体の決定としてそういう決定になったんじゃないかということは北海学園の先生方に少しは聞いてはいるんですけれども。

浦　　そこら辺のことは、学校法人北海学園さんの決定ですので、私どもの方がお話しできる内容じゃないですね。

姉崎　そうすると、北見大学の方がこの協議会にもし出ていらっしゃるなら、多少そういう、札幌の声よりは少し温度差があって、より強くそういう地域のことを考えていらっしゃると。

浦　　もちろんそうですね。そうだと思っています。私どもの組織としては、北海学園大学と北海学園北見大学というものは全くの別物で、学園の北見キャンパスでもないです。ですから全く別組織ということで、今度平成18年に立ち上げるのも別の大学だと聞いております。ですから、協議会に入っていただいた先生方も何とか残れるようにと。

先ほどの奨学金の以外にも、何とか地元の北見市民に対して地元の大学だということをPRするために、私ども市の職員が出向いて行って、まちづくりとかそういったものが方針になりましたし、なるべく北見にこういった大学を残すことが必要なんですよとPRはしたつもりだったんですが、どうしても入学者数の減少というかたちになり、定員割れが続くので国の補助金が受けられない状態だということで、そうなってきたときにはご自分たちが全部出すことになるので、そうなると大学の経営内容について私どもがどうのこうのというのはなかなかできることはないです。他のところでたまたま運営費補助をしている学校もあるかと思いますけれども、北見大学では学校を増設する時の資金ですとかそういったものについての補助はしておりますけれども、通常の運営費に対する補助というのは行っていないですね。

市の財政補助

光本　ちょっと古い話なんですけれど、1988年から1992年まで「私立大学教育振興補助金」というものを、これは短大の方かな、に支出されていたと思うんですが、これは運営費補助とはまた別のものですか。

浦　　それは全然違うものです。

光本　具体的にどういうものに対しての補助でしょうか。

浦　　短大の開設に対する補助というようなかたちです。昭和57年、それから、私立大学振興補助金ということで昭和63年から平成4年まで、毎年2000万円ずつを、これも学科増設というような名目で補助をしていたということです。

光本　毎年学科増設ですか。

浦　　本当は単年度でお支払いするものなんですけれど。

光本　分割してということですか。

浦　　それは実は北見市という行政単位の理由です。

光本　日赤の方にも開学段階での土地の無償譲渡ですとか設立支援事業費充当分とかいうようなことでいろいろと補助されていますけれども、開学後も大学支援事業費充当分というのでしょうか、こういった名

目でかなりの額を補助されているというふうに新聞には載っていたのですが。

浦　本来的にはいっぺんに大学の方には支払っているんですけれども、その部分を行政内部で手立てをしたものですから。実は行政の中にはいろいろ基金がありましてね。一般の家庭でいうと貯金ですね。例えば、株式を買うための貯金ですとか家を買うための貯金ですとか、そういう貯金というような意味合いで目的基金というのを持っているんです。その目的基金というのはその目的のためだけにしか使用できないということです。それを支援のために一時借りました。で、毎年それを借りた分を戻していきますというのがそこの部分なんですね。

光本　じゃあ、具体的には大学に行くんじゃなくて借りた分を市の中で基金の中に戻していくための費用だということですね。

浦　そうです。大学の方にはもう一括で行っているわけです。そこは分割じゃなくて。

光本　では日赤に対しては設立のときにお金は行ったきりだと。それ以降は助成はしていないということになるわけですか。

浦　はい、日本赤十字大学は約 100 億円。そのうち道が約 25 億円。北見市が補助金と寄付金を合わせて 50 億円、残りは日赤、こういうかたちになっています。先ほど土地の無償譲渡といいましたけれども、用地、造成を含めて 5 億 5000 万円くらいですか。

姉崎　住民の間の土地投資というようなことをニュースで見たりしたんですが、それはそういう結果の上でいまのところに立地造成をされたということですか。

浦　地方拠点都市というところで北見市が指定の地域ということで指定を受けたわけなんですが、その指定の地域というのが北見市の駅前ともうひとつ北見から札幌寄りに向かったところに相内地区というところがあるんですけれど、そこのところを藻岩地区といっているんですね。モイワスポーツワールドというスポーツ施設が集約されたところがあるんですけれども、そこのところを文教スポーツ地区というかたちで当初は指定を受けました。そこのところに大学を立地をするという予定だったんです。

光本　パークゴルフ場があるところですか。

浦　そうです。そこのところに大学をつくる予定だったんです。それがいろいろありましてそこのところではなくて現在のところに移すということになりまして、そこでその拠点地域の変更ということも出てきました。住民との関係といいますと、当初は相内地区に行くという話だったのがこっちに来るということで、そこの部分ではどうしてなのかという議論はありましたけれど、いまの地区に来ることに対してそこの住民の方々が何か、ということはないです。先ほどいいましたように、補助金の部分はある程度起債なりで補填することができたということで、どうしても拠点地域の指定とそれも必要だったということです。

政策優先順位と市側の体制

姉崎　自治体が財政的に厳しい中で優先順位を政策的に決めるときに、文教型のものはいま後退している場合が多いので、そういう点でいうと勇断というか、熱心にずっとやられてきたということではあるけれども、それに対して不満を持っていたりする方も多少いるんじゃないかと外から見ていると思うんですけれども。

浦　北見大学の頃はまだどちらかというと右肩上がりの経済成長だったと思うんです。看護大学の方でいいますと、これもバブルがはじけた後に日本の経済を何とかしようとして国がかなり総合経済対策ということで、かなりの年度にわたって毎年補正予算をかけながらカンフル剤ということで景気を上げよう上げようと、相当地方自治体は国のお付き合いをして、無理をして背伸びをしてきた状況です。

そういったところの中で、いまおっしゃられる社会資本、インフラ整備は相当数のボリュームで毎年できました。こんな話をするのも変なんですが、いま 3300 どこの自治体でもかなり厳しい状況になっているというのが間違いなくその結果なんですけれども。ですから、文教にかけてとかいうことではなく、そういった部分でインフラ整備を行うことについて住民の方たちからクレームがあったとか、そういうことはございません。

いまとなってはちょっとかけ方がというのはあるかと思うんですけれど、その当時としてはありませんでした。それがたしかに国の政策の一つだったわけです。国は、ある程度借金してでもいいからインフラ整備しなさいよ、その借金した部分については国は交付税の中で償還金を補填してあげますというのがずっと続いてきました。変な話ですけれど、GATT のウルグアイラウンドの合意の中で、農業関係を重視しなさいということで、農業予算の中でできないものはあの当時はほとんど何もなかったんですね。農業関係予算の中で道路もできるし、いろんなところにある公営温

泉ですとかもけっこう農業予算の関係でできている部分もあります。そういうようなかたちで建物を整備して、それを起爆剤として日本経済をうまく成長の方に持っていこうという当時の国の政策だったんです。地方自治体もそれにならえをしてというようなかたちで同じような政策をしてきました。

ですから、いまでいう優先順位ですとか選択ですとかそういうような概念というのは当時は全くなかったという感じですね。一部その中で何でもできないから選択はしていたんですけれど、いまみたいな優先順位をつけていたとか事業評価としていたとかそういった動きというのは当時はまだなかったですね。

光本　優先順位というふうに考えた場合、先ほどからだいぶお話がありますように、北見市の場合学園都市構想以来、大学というものを地域の核として重視してきて、段階的に整備を進めてこられた。ですから、これまでの流れからいうと、市政における優先順位というのは必ずしも低くはないと思うんですけれども、実際に大学が減少するというような段階になって、市政の中での位置づけといいますか、今後はどういうふうになさっていこうというふうに考えてられるのかということと、それから、市側の体制はどうなさっているか。大学に対しての窓口というのは専ら企画部企画課こちらだと考えてよろしいのでしょうか。

浦　　たまたま四つの大学の中の二つが欠けるようなかたちになってしまったんですけれど、あくまでも北見は文教都市、研究学園都市という構想をベースとしてこれからも続けていかなければならないと思っています。ただ、こればかりは行政としての組織の決定ですので、それよりも先にいまの状況の中で別のものに優先順位があるということであれば、他の方向に舵を切る場合があるかもしれないと思いますが、いまの順位の中では、それは間違いなく柱の一つの大きなものであると考えています。

それと、窓口が企画ということなんですけれど、これはあくまでも大学としての窓口はすべて企画部所管でしますと。ただそこの中で、例えば、北見工業大学は産業振興の関係、産業クラスタですとかそういったこともありますので、それは所管部のところで持ちます。私どもの場合で申し上げますと、商工部の中で産業振興課というのがございますので、そこのところでそういうかたちになっています。

光本　看護の方も、例えば医療職員の計画的養成ですとかそういったのは市としてはあるんでしょうか。

浦　　市の中には看護大学と直接携わっているセクションというのはまだないんですが。ですからそういうふうに企画課の方で窓口となっている、こういうかたちです。

光本　所轄する部署が、諸政策のそれぞれかかわるからそれぞれバラバラになっていると思うんですけれども、大学政策あるいは高等教育政策として一本その筋を通す、そのために産業政策や看護とかいろんな分野をバラバラに見るんじゃなくて、それらとかかわりがあるんだけれども、大学や高等教育政策としていったん束ねて、その中の産業にかかわる部分とか看護にかかわる部分とかそういうふうに見る見方があると思うんですけれども、そういったふうにはなかなかなりそうもないということですね。

浦　　もちろん政策として一つのものを打ち立て、それが施策となって枝分かれしていくときに、どういったようなところが中心となってやっていくのかとおっしゃられているんだと思うんですけれども、それについては、例えば、共同研究産業クラスタ関係については産業振興課がやりますよ、医療関係の部分については保健福祉部が看護大の方と中心となってやりますよと。そこのところの一つの大きな政策として、大学といっしょになってどういうまちづくりを進めていこうかということは企画部が中心となってやるかたちになっておりますので、工業大学とは共同研究センターを含めていろんな研究をしております。看護大学の方とはまだ実際にそこまでのところには至っていないというのが現状なんです。看護師を含めて人的な養成をするところですので、なかなか共同研究というようなかたちまではいまのところはいけていないのかなと思います。ただ、介護ですとかそういった分野に関してこれから共同研究をやっていける部分というのは数多くあると思いますし、看護大だけではなくて看護大と工業大学と合わせてそれに市がいっしょになったかたちでの研究はこれから間違いなく増えてくると思います。

光本　企画課の方と工業大学とで何か協議されたりとか、そういうことはあるんですか。

浦　　企画課の方と工業大学の方というのは、工業大学の地域共同センターというのがございますので、そこに対する窓口を企画課がやっております。

地域の大学との連携

姉崎　先ほどクラスタの関係のお話が出ましたけれど、地域の大学との共同の接点、やられている事業などを今後どういうふうに増やしたりされるのか。

浦　具体的なとりくみでは、工業大学の地域共同センターがやはりメインになっています。それぞれ共同研究ですとか、一般企業を含めていろんなかたちで共同研究をやっていただいておりまして、年間 100 本弱くらい共同研究をされております。そのような中で行政とのかかわりでいいますと、市といたしましてもバイオマスです。北見でも下水の処理場がございますので、そこから発生するメタンガスを有効に利用できないかということで、工大といっしょに共同研究をやっております。さらに、オホーツク海沖にメタンハイドレードというのを聞いたことがあるかと思うんですけれど、海中の土のところにシャーベット状の天然ガスがあって、それを海底から引き上げて天然ガスとして利用したいと、こういったような内容のことを、いま工業大学と市と民間企業とがいっしょになって研究を進めております。

今後の方向ということですけれども、大学で持っているデータというものは相当莫大なものだと思います。いままで大学というのは、あまり表には出そうとしてこなかったところもあると思いますので、我々もそうなんですけれども、通常民間の方たちは大学はいったい何の研究をしているのかというのが見えていないと思うんですね。こんなことあれば助かるんだけれどなと思っていても、どこにそれを持っていけばいいのか分からない。そういう部分があったと思いますので、なるべくそういったものをオープンにして大学で行っている研究がすごく身近なものになれるようなかたちを考えていければと思います。ですからそれは工業大学しかり、あとは看護大学も同じようなかたちですよね。そういったようなかたちで、いまの街中のニーズを何とか吸い上げ、そこの接着剤を行政がある程度担わないといけないのかなと思います。

政策への大学教員の関与

姉崎　政策決定をやる場合に、国もそうですけれど、審議会や専門的な委員会をいろいろ立ち上げてそこで議論をしてそれをもう一回政策に移すということが多くなっていますけれど、自治体としてある種の方向性をつくっていくときの委員会その他には、ある程度地域の大学の先生方は参加しておれらるのでしょうか。

浦　審議会は全部が全部じゃないですけれど、大学の先生方は相当数お入りいただいています。総合計画をだいたい 10 年間隔でつくりますけれども、その総合計画審議会の中にも大学の先生方も入っていただいています。同じように、都市計画審議会の中にも入られておりますし。いろんなところに大学の先生は入っていただいております。

姉崎　それはこの地域の大学というよりは全道レベルの大学ということですか。

浦　ほとんどがこの地域のというかたちです。ですから地元の大学の先生です。

上田　3 大学 1 短大で均等に、という感じですか。

浦　そうですね。何十人規模の大きいところになりますとだいたい 1 大学で 1 人、ですから、3 大学で 3 人。それが 10 人規模くらいになりますと、それぞれの専門性を持たれているようなところで 1 人とか 2 人とかそういうようなかたちです。

逆に大学の先生方も、独立行政法人になったときに自分たちがやっていることを外にある程度見せていかないことには、いったい何を研究しているのって聞かれたときに困るようになると思いますので――すみません、こんなこと申し上げて――それで、どんどんこうやって外に出てきていただいて、私はこのような研究をしていますよということをいっていただけるようになってきたと思うんです。どうしても私たちが考えているイメージでいうと、一昔前の大学の先生は研究室に閉じこもって研究に没頭しているというのが大学の先生だというようなイメージだったんですけれど、やっぱりだんだん変わってきているんじゃないかと思いますね。

姉崎　工大は特にそういうことを熱心にやっていらっしゃるんですか。

浦　そうですね。工大の先生は非常に熱心ですね。本当にいろんなところに来ていただいて、自分たちはこんなような研究をしているというようなことをいっていただいています。

市民と大学――大学振興協議会

上田　たぶん大学と接する機会の多い職場にいらっしゃるのでそういうふうに大学教員のイメージが変わってきたなと実感されていると思うんですが、北見市民にとっては大学のイメージというのは変わってきているんでしょうか。

浦　難しい話ですね。北見市民にとってですか。市民の方が直接大学の先生とお話しするというようなことはやっぱりございませんね。

上田　先生方が市民活動に参加されていくような。

浦　そうですね。どちらかというと大学の先生とは研究発表みたいなかたちで、何とか研究発表会だとか何とか講習会だとかいろいろやられていますよね。そういうのに出席していただく方は大学の先生のことは分かると思いますけれども、出られない方はなかなか大学のイメージはつかめないと思います。そして逆に、審議会だけじゃ難しいのかもしれないですけれど、どんどん企業なりの中でいろいろと入っていただいて、それを一つのきっかけとしてまた別なところへ行っていただく、そういったかたちがおそらく今後増えていくんじゃないかなという気がします。なかなか市民の方に対して直接、私こういうことをやっていますよということは難しいですね。

上田　先ほど、北見市民に対して地元の大学であることのPRを市役所の方でも積極的にされたということをおっしゃっていたんですが、それは例えば、地元の高校生が北見の3大学1短大に進学するようにPRをしたという理解でよろしいんですか。

浦　本来的には北海学園北見大学の振興キャンペーンの中の策の一環だったんですけれど、そこだけをというわけにはいかないですから、それで先ほどの奨学金も私立大学というかたちで活用しましたし、そういうようなことで市内の高校を、私どもを含めて回っています。そしてなるべく学園大学、いいかえれば地元の大学という言い方をするんですけれども、先ほどちょっと抜けたんですけれども、北海学園北見大学振興協議会というのを平成14年に立ち上げました。

光本　何回くらい開催されたんでしょうか。

浦　平成14年のときには3回ほどやっています。

姉崎　どんなことが話題に上るんでしょうか。

浦　いろいろやったんですが、かなりの項目数が出まして、それぞれいろんなところに発送してみましょうということで、こんなようなパンフレットもつくってやったりとか、北見市の封筒のところにも研究学園都市ということで封筒の下に工業大学と北見大学、看護大学ということで名前を書かせていただきましたし、検討した結果、25くらいのアイデアを実施しています。北見は高知市と姉妹都市になっているものですから、昨年は高知の高校にも出向きまして、何とか北見大学のほうに来ていただけないかということで、市長にお会いしまして、高校で北見のPRとともに学園大学のPRもしてきました。

光本　協議会自体はもう解散ですか。

浦　いや、解散はしておりません。

光本　今年度もまだ継続してやっておられる。

浦　継続はしておりますけれども、今年度はまだ会合は開いておりません。

光本　でもやらないわけではないということですか。

浦　まだどういうようなかたちになるかははっきりとは決まっておりませんけれども。

学生のまちづくりへの参加

姉崎　大学が見える見えないということでは教員もそうですけれど、学生が先ほどあまり出てこないんじゃないかというお話がありました。函館に行ったりすると、公立未来大が地域のまちづくりの中に学生が参加するかたちでお祭などに参加するとか、各地でそういう地域再生の中に大学が一役買うというような動きもあったりするんですけれども、そういうようなものは25のアイデアの中に含まれているんでしょうか。3大学が街に出てきて自分を見せるというか、そういうようなことなんですけれど。

浦　3大学間の連携ではありますが、3大学がまとまって北見の街中に出てくるということは具体的にはこの中に出ていないんです。けれど、学生間交流会というのがございまして、それが3大学の学生さんたちが集まりまして、各種イベントにかなりお手伝いをしていただいていたというのは前からやっておりました。

光本　それはいまもあるんですか。

浦　いまは休眠状態ですね。

光本　ホームページで少し昔やっていたのは拝見したんですけれど、2002年くらいで終わっていたような気がしまして。

浦　学園大の方が中心になってやっていたんですけれども、その方が卒業されてしまったもので、その後ちょっとやっていませんね。ホームページご覧になりました？焼肉屋マップというのが出ていましたよね。おもしろいとりくみでいうと、北見ってあまり知られていないんですが焼肉屋さんがすごく多いんで

すよ。その中で焼肉屋さんを回って、どこにどういうものがあるかそういうのを書こうということで、「焼肉祭」、そういうようなかたちでお手伝いをしていただいていました。さっきのオホーツクビアフェストもお手伝いしていただいていましたし、こういうのもどなたか率先してやっていただける方がいればやっていただけるんでしょうけれど。

姉崎　北見大学は観光学科を商学部の中に新しくつくりましたけれど、そういう意味ではここは工業の中に商業の都市で、先ほどもあった技術の拠点だとか中心都市ですよね、そういう点で重要なアイデアを出す部局でもあったんじゃないかと思うんですけれど。

浦　それぞれの大学が違った発想で見ていただけると、いろんなおもしろいアイデアというのが出てくると思うんですよ。一つのものに対しても見る角度が違うと違うような見方ができると思うんですけれど、ですからその中でいいますと一カ所その視点が欠けてしまうというのは、さっきいったように非常に残念だと思いますね。

市民・住民の大学に対する見方

上田　個人的なレベルで結構なんですけれども、ご自身のお子さんを北見の大学に行かせたいと思いますか。それから、北見市に住んでいる住民の方として北見市の大学にどんなことを期待されているでしょうか。

浦　個人レベルの見解としては、私としては、本人の希望が一番なんでしょうけれど、違うところを見てもらいたい、という希望はありますね。その大学生活が終わった後どうなるかというのはまた別の問題だと思うんですけれど、たまたま18年ここで暮らした中で、全く違うところで生活してみるというのも一つの方法かなと。けっこう勉強になりますからね、やっぱり。自分ひとりで全然違うところで生活して全く風土の違うところというか。そういう経験をさせてやりたいなというふうには思っています。それが個人的な見解です。

そしてもう一つ、北見市民としてでは、大学生はもっともっと街に出てきてもらいたいですね。街に出てきてもらっていろんなところでいろんなことをやっているなと。それこそ変な話、また大学生出てきてバカなことをやっているなと、それでいいと思うんですよね。それが学生の特権じゃないかなと私は思います。だからそれこそ学生だからできることであって少々無茶なことをやっても、違反するとかいうことじゃないですけれど、無茶なことをやってもこれは学生の特権だなって大目に見てくれる度量を持っている大人が逆に少なくなってきたから、学生が出てこなくなってきたのかなとも思いますけれどね。学生さんがやることは少々大目に見てやるっていうのが昔の大人だったと思うんですけれどね。それこそ何年か前は工大の学生さんたちが、そこでお祭りのときとかに酒飲んでひっくり返っていましたけれども、そんなの良いか悪いかは別にして、学生だなと。そういったようなかたちで本当に学生さんたちもどんどん出てきてもらいたいですね。そういったようなものがあれば逆におもしろいまちづくりができるのかなと思いますね。

いまどこの街でもそうなんでしょうけれど、中心市街地、中心商店街が空洞化してしまっているのであれば、学生たちが、何か俺らはこんなこと考えているんだけれど手伝ってもらえないかというのを役所なりどこかに持ってきてもらえれば、それも一つのきっかけになってきますよね。そういったようなことで、北見は実はチャレンジショップというのをやって、これは別に学生に限るわけじゃないんですけれども、若い人たちがやりたいことがあるんであればある程度支援しますよと。そういうようなとりくみをやっています。学生さんがそういうようなものを十分利用してもらって、自分たちこんなに情報を持っているからこんな発信したいよとか、そういうようなかたちでどんどんまちをつくっていければな、という気がしますね。車で今日北見に来られたということですけれど、これからまた行かれるときに国道を通って行かれるでしょうけれど、おそらく郊外っておそらくどこに行っても同じような看板しか立っていないような街になった気がするんですよね。もっと違うようなかたちの街ができればなというような気がするんですけれども、難しいかなという気がしますね。

姉崎　公務員が地域の中でかなりの比重を占めると思うんですが、北見市役所の場合勤めていらっしゃる方はだいたい道外や道内の他の大学を出て戻っていらっしゃる方が多いのか、地域内の大学を出て入られる方が多いのか、そのへんはどうなんでしょうか。

浦　相対的な人数で見れば北見市以外が多いんですけれど、1大学でいうと北見工大が1番で、2番目は学園大学だと思います。あと市内の高校を卒業して入られている方もかなりいますので、出身者でいうと圧倒的に北見でしょうね。北見工大、北見大学でも他のところから来られて、ここで学生生活を送られて、そして役所に就職されているという方もいらっしゃ

います。

留学生と地域の国際交流

上田　北海学園北見大学が移転してしまった後に、そこはまた留学生を受け入れていくようなかたちの施設になる可能性が高いというようなお話なんですが、北見市全体としては国際交流に対する意識というのはどんな感じなのでしょうか。

浦　　国際交流に対する意識といいますか、留学生を受け入れる制度はやっております。留学生に対する支援事業ということで年間1人20万円の支援を行っています。北見工業大学にもかなりの留学生の方々が来ていただいておりますし、北見大学についても同じように留学生がいらっしゃっています。

中国からの留学生の方が全国各地でいろいろな話題がありましたので、かなり日本の国自体としてビザの発給を制限しておりまして、いろいろと制限する部分だとかそのようなやり方をしているみたいです。ですから、いま来られている方というと、たしか韓国の方が一番多い気がしますね。北見市としては、どこの国の方でもそれはお受けできると、そういう状況にはございます。

オホーツク地域の大学間連携

石山　浦さんは企画課にいらっしゃってどのくらいになるのですか。随分長い間携わってこられてきたのかということが一つと、このオホーツク地域だとやはり北見が中心都市になると思いますけれど、紋別と網走と北見の大学が連携して交流事業を10年くらい前からずっと毎年行われてきたということなんですけれど、それについて支援されていることは何か北見市としてはあるのでしょうか。

浦　　私が企画課長になったのは昨年の6月です。ですから1年と1カ月くらいです。大学に関する支援ということですが、大学間交流セミナーというのを毎年やっております。北見・網走・紋別の大学間の交流事業をやっておりまして、それぞれの中で行政として支援はしております。お金の部分を含めてですね。

石山　毎回市町村を回ってやっておられるということですが、北見でやったことはあるんですか。

浦　　あります。そこは3地域持ち回りでというようなかたちでやっております。

道都大学がこの後どういったようなかたちになるのか分かりませんが、そういうようなかたちでいろいろ学生間交流が進んでいけば、北見だけじゃなくてオホーツク圏として人材の育成ができると思います。せっかくこの北海道の東に来たんですけれど、決して“はずれ”じゃないんですよ。とってもいい街なんです。

地方自治体と私立大学

光本　私立大学と地方自治体がどのようにつきあっていくかということは全国的な問題になっているにもかかわらず、一筋縄ではいかない難しい問題だと思います。紋別と道都大の問題も同じような状況だと思うんですが、北見市の場合でも北海学園との関係は切れたわけではないと思いますけれども、北海学園に限らず、日赤もそうですけれど、今後、市として私大とどうつきあっていくか、あるいは学校法人とどうつきあっていくかということは非常にいろいろお考えになっているんじゃないかと思うんですけれども、そのへんの難しさというか、これまでと違う付き合い方というか、どのようにされていこうとお考えでしょうか。

浦　　本当に最後に一番難しい質問をされたという感じなんですけれど、これから私立大学と自治体のあり方というと、もちろん法人格はまったく別物ですので、その中でどういったような協力関係を持っていけるのかということなんですけれども、大学としてはやはり何か一つ魅力的なものを持っていないとなかなか学生さんは集まってこないと思うんですよ。ここの地域は素晴らしいという、その魅力をつくり出すのは行政かもしれないです。でも、この大学が素晴らしい、ここの部分が素晴らしいというかたちっていうのはやはり大学さんの努力なんですね、やはり。ここに来たらこんなことができる、ここに来たらこんなことが学べるというのは。

その中でできることは協力をし合いながらどんどんやっていきたいと思うんですけれども、だからといって、お互いにもたれかかるような関係だけはもう今後はどうやっても取ることはできないと思うんです。いくら残したいからといっても、評価をやり優先的にと考えたときに、本当にそれでいいんでしょうということが市民に対して説明ができなくなると思うんです。

ですから、それはお互いの努力だと思うんです。大学側がうちの大学はこれだけのものをやっているのに行政が何もやってくれない、何も手伝ってくれないということであれば、それは行政サイドが襟を正して全部新しいまちづくりに対してこうこうこんなことを、というふうにやっていかないとならないでしょう

し、そこのところというのはある程度、こういう表現が良いのか分からないですけれど、“つかず離れず”みたいなかたちですか、そんなに深入りをしないかたちでの協力関係ができれば一番いいのかなと。抽象的な答えですが。具体的にいくら支援をしますだとか、人がこれくらい減ったときにはなんぼ補填しますかだとか、そんなようなことはこの後どうやってもできるような状況じゃないと思いますので。

光本　定量的な補填に変わる新しい補填という言い方がよいのか分かりませんけれども、やっぱり具体的にはお金だと思うんですよね。市ができることというのは。その場合、何に対してどういう根拠でお金を出すのかということが新しい論議ですよね。大学に対してお金を出す場合に。それがやっぱり非常に難しい問題と思うんですけれども。

姉崎　逆にいうと、国立大学が法人化してある種私学化に近いようなかたちで、全部国でお金が出なくなる。そういう意味では、国立と私学が競合関係になってくる。自治体と国立はわりと距離が遠かった部分がありますけれども、その部分が選択肢としてもっと視野にはいってくるんじゃないかと思うんです。そのへん難しいですね。どういうふうにつかず離れずでいくかということが。

光本　大学側としても問題になるところですね。

浦　　一つの自治体に一大学ということであればある程度可能な部分もあるかもしれないですけれども、複数大学となってきたときに、どこにどういうふうにウェイトを置くかというのはそれはきちんと説明責任が必要になってくると思いますし、なかなかそういうかたちでというのは難しいかなと思います。

実際に市が行政としてできるっていうことは、やはりそのなるべくここの市の人口を減らさないというようなかたちのまちづくりをしていかないとならない。それが市としての魅力だと思うんです。どんどん人が減っていくような街であると、どうしてもイメージとして衰退しているというような、そんな街にわざわざ４年間もということじゃなくて、人が増えていっているんだよ、何か魅力があるんだね、そういう街なら４年間暮らしてみたいね、こういうように思っていただくのが一つだと思うんです。

ですから逆にいうと、行政ができるのはそういったようなことで、活気のある街だよと。こういうふうにいろんな方に思っていただける街、そのような街をつくっていくことが、ひいては学生さんも来ていただけると。もちろん大学としてもいろいろやっていただくことはあるんですけれども、大学と街との今後の関係というと、おそらくそういったような関係になっていくのではないかなという気がします。お金ということじゃなくて。

姉崎　どうもお忙しいところありがとうございました。